

第 12 章『二都物語』

孤独な群衆の暴力性

矢次 綾



「海の波が高まる」（第2巻第22章、フレッド・バーナードの挿絵、ハウスホールド版）
「食べ物がないれば草を食べればいい」と言った、かつての財務長官フーロンに、群衆が実際に草を食べさせている。

第一節 未曾有の重大事件を記述する

『二都物語』のプロットの中に据えられた歴史上の重大事件、フランス革命はヨーロッパ史上初の「大衆的な経験」であり、歴史的变化が実際に起きることをヨーロッパ中の人々に実感させた。ルカーチはそう指摘し、フランス革命がそのような特異性を持つ理由を、暴力を含意する動乱という言葉を用いて分析している。すなわち、大衆は未だかつてない短いスパンで動乱が頻発するのを経験しながら、自分たちはもはや当たり前前に起きていたことを経験しているわけではないという印象を抱いた。そのように論じながら、ルカーチはそれ以前に起きた動乱が引き起こした混乱状態と、フランス革命勃発からナポレオン戦争にかけて、さらにナポレオン戦争終結後もヨーロッパ規模で続いた混乱状態との違いを比較検討した。革命勃発以前の動乱として、彼の念頭には、例えば、ディケンズが『バーナビー・ラッジ』で扱ったゴードン暴動があったと推測される。ゴードン暴動は、数万人に及ぶと言われる暴徒がニューゲイト監獄襲撃を含む破壊行為を行った、ロンドン史上最大の惨事である。それでも、この暴動が勃発から約一週間後には鎮圧されたのに対し、フランス革命は一七八九年の勃発以降、その様相を変化させながら諸外国を巻き込む混乱状態をもたらし、十九世紀半ばになっても、それと同規模の動乱が起きるのではないかという不安に人々を陥れていた。ディケンズもそのうちの一人で、

チャーティスト運動やその他の労働運動の動向を見守りながら、危機感を募らせていた。その証拠に彼は、『二都物語』の中で、フランス革命とそれに続く動乱を、一時的な価値の逆転であるはずのカーニヴァルが日常化した異常事態と見なしている。これは、彼がゴードン暴動を、祝祭としてのカーニヴァルの特徴を保持するものとして描いたのと対照的である。換言すれば、『バーナビー・ラッジ』で彼は、祝祭としてのカーニヴァルではその最中であつても終結後に萌芽する種が育まれているという、バフチンの主張を裏づけるかのよう²に、暴動鎮圧に貢献するジョン・ウイレットに「時代は変わった」（第六八章）と宣言させる。そのようにして彼は、秩序がまだ混沌とする段階において既に、時代が刷新されつつあることを示唆しているわけだが、一方の『二都物語』には、動乱収束の気配を書き込んでいない。すなわち、時代を察知する知見を備えていたチャールズ・ダーネイは、実父と叔父が犯した罪に由来する彼自身の責任を追及する文書が小説結末部で公開されるや否や、旧制度時代に心理的に退行し、かつての雄弁を小説中で振るうことはもはやない。彼の息子に新時代の希望が託されているとしても、また、革命家集団の中心人物マダム・ドファルジュが銃の暴発によって死亡しても、革命家集団が弱体化する様子は描かれていない。そのため、彼らがその後も人々に革命への同調を強要し続け（図版①）、同調しない者を回転砥石やギロチンを使って虐殺する血なまぐさいカーニヴァルを繰り返していくであろうという印象を読者は抱くことになる（矢次九）



図版①「愛国心の印である三色帽章を付けるよう旧貴族に強制する共和主義者」(制作者不詳、1793年頃)

かつての支配者と被支配者の力関係が完全に逆転している。

一〇。

人々にこのような特異性を感じさせた歴史上の事件であるフランス革命について、それ以前に起きた動乱とは異なる観点から記述され、その歴史的意義が検討される必要があることは、勃発後の数十年間に渡って認識されていなかった。また、革命勃発後間もない時期の歴史家は、革命期を恐怖時代以前の「良き時代」とそれ以後の「悪しき時代」に分ける傾向があったものの、共和国の成立は集団による暴力行為と関連づけられ、批判的に語られることが多かった(Jones 41-42)。中でも、名誉革命を歴史の一つの到達点と見なし、革命がほぼ無血で達成されたことを誇るホイッグ党の論客たちの多くは、フランス革命を、名誉革命を模倣しようとして失敗したものと見なした。そのうちの一人で、革命勃発直後、恐怖時代の到来を待たずして『フランス革命についての省察』(一七九〇年)を著したエドモンド・バークは、それまでの伝統、慣習、世襲制度などを破壊した革命家集団を非難したが、それは、「権利の章典」(一六八九年)で謳われているのが「国民が世襲的王位継承を選択したこと」であり、「統治者を選び政府を組織する国民の権利」ではないとするホイッグ党の中でも保守的な立場からであった。例えば彼は、マリイ・アントワネットの寝室に乱入した群衆を「残酷な悪漢と暗殺者」と呼び、彼らのわめき声や国王夫妻に対する侮辱的な行為を糾弾した。⁴ブレイルズフォードの言葉を借りるなら、バークは「革命の真の原因であった農民の不幸にも、選挙民の嘆願書に列挙された不正と悪事のリストにも、飢饉に

も、酷税にも、革命の引き金となった暴虐な特権にも目を向けず、マリリー・アントワネットの痛切な悲哀だけを見た」のである。⁵

フランス革命の歴史的意義を最初に認識した有識者だと考えられるのがミルである。ミルはスコットの『ナポレオン伝』（一八二七年）の書評の中で、フランス革命が「民衆（the people）」によって創造され、「近代史におけるどの時代にも類が見られないヒロイズムと献身性を持った民衆によって開始され、遂行され、防衛され、終止符を打たれた」ものだと述べ、⁶「ミシュレが『民衆（Le Peuple）』（一八四六年）で示した見方を先取りした。⁷そしてミルは、フランス革命が熱狂した群衆の本質と行動を熟知した者によってのみ理解され、叙述され得るものだと主張しながら、この未曾有の重大事件を検証するには新しい視点と手法が必要不可欠だと言明したのである。もつとも、ミル自身は、歴史上で展開するドラマと距離をとり、それができるだけ抽象化し、省察することを通して教訓を導き出すという十八世紀的な歴史記述の手法に慣れ親しみていたために、自分が理想的だと考えるやり方でフランス革命を描くことができなかった（Jones 42）。

フランス革命を契機にして群衆が政治的な権力を獲得し、一つの勢力として歴史の進展に関与するようになったという見方を示したのはカーライルである。彼は『フランス革命』（一八三七年）において、従来の歴史記述のあり方に囚われずに独自の手法でフランス革命を描き、自由間接話法などの技法を駆使し

て読者の興味をかきたてながら話を進めている。⁸ 次の引用は、一七八九年一〇月に行われた「ヴェルサイユ行進」において、国王に対する陳情が遅々として進まないのに痺れを切らした女性たちが前進した後に、暴力沙汰の火蓋が切って落とされる様子を、カーライルが描写したものである。カーライルは彼女たちを酒神ディオニソスの従者で狂乱した女、メナドたちに喩えている。

メナドたちが「バステイーユの義勇兵ブルノー」を指揮官に揭げてさらに前進している。女たちは大庭の鉄格子まで進み、事の次第を見届けようとする。雨に濡れた鹿革の服に身を包んだ人間の我慢には限界がある。近衛兵のサヴォニール中尉は長時間その状態を強いられ、ほんの一瞬、堪忍袋の緒を切ります。中尉はメナドたちを蹴散らすのみならず、猛然として指揮官のブルノーに襲いかかると鞘から剣を抜き、円を描くように逃げ惑うブルノーを調子に乗って追いかける。苛立ちは感染するものであり、その場に拘束されていた近衛兵は気晴らしを必要としているわけだから、その華々しい光景を見るや、他の二人の近衛兵も同様に堪忍袋の緒を切らし、剣を振り回し、宙に仰々しい円を描きながらブルノーを追いかける。然るに哀れなブルノーは歩を速めて隊列から隊列へと退却するしかない。ブルノーはバルティア人の如く退却しつつも応戦して叫ぶ。「奴らは我々を虐殺しようとしている」と。（第一部第七卷第七章）

この小競り合いをきつかけにして、ルイ十六世をパリに連行するに至る事件の終局へと流れるように事が進行し始める。カーライルはその瞬間を『フランス革命』のその他の箇所と同様に現在形を用い、臨場感を高めながら表現している。一見したところ、ブルノーとサヴォニエールの動きを中心に描写されているが、彼らの追跡劇を誘発させているのはメナドの如く怒り狂った女性たちの動きであり、フランス革命の重要局面の一つであるヴェルサイユ行進における群衆の影響力の大きさが存分に描出されている。

一九七三年のペンギン版『バーナビー・ラッジ』の序文でキャサリン・ティロットソンが指摘しているように、ディケンズは『フランス革命』に熱狂し、出版当初はどこに行くにも持ち歩いたほどだった。彼がそれほどの感銘を受けた理由は、カーライルが一つの勢力としての群衆を巧みに描いているためであろう。それを裏づけるかのように、ディケンズは『フランス革命』が出版された年に『ベントリース・ミセラニー』に月刊分載し始めた『オリヴァー・トウイスト』第一〇章において、上で引用したカーライルの一節とよく似た追跡劇を展開させている。それは、『フランス革命』の中でサヴォニエールがブルノーに襲いかかるのを見て他の二人の近衛兵がそれに倣うように、スリを働いたと勘違いされたオリヴァーを、「泥棒だ、捕まえろ！ 泥棒だ、捕まえろ！」の声に反応した群衆がその規模を大きくしながら追いかける場面である。ディケンズはカーライルと同様にこの箇所で現在形を用いて臨場感を高めながら、人

間が特定の時流にいかにか流されやすいかを表現している。そうしながら彼は「人間の心の奥底には、何かを追跡することへの情熱が根づいている」と指摘し、仮に盗人であるとしても幼い子供を大挙して追いかけてしまう人間心理について考察している。この場面を描いた段階でディケンズが既に『フランス革命』を読んでいたかどうかは定かでないが、群衆が周囲に与える影響力を描出することに彼も関心を持っていたのは確かである。もっとも、次節以降で述べるように、革命家集団の描き方においてカーライルとディケンズには違いがある。この点を考慮するならば、ディケンズが『二都物語』の「序文」の中で、『フランス革命』を「信賴にたる証言」として参照したと明言しただけではなく、「あの恐るべき時代についての一般的、物語的理解において、何らかの付け加えができること」を望んだと述べたとき、彼は群衆の描き方において、カーライルのそれとは異なる独自の視点を提示したと自負していたのではないかと考えてくる。

第二節 ディケンズのサンキュロティズム研究

カーライルは『フランス革命』を最初に公刊したとき、それに「サンキュロティズムの歴史」という副題をつけていた。この場合の〈サンキュロティズム〉は、旧制度を破壊し政治的な権力を獲得していった革命家集団を指す。彼はこの集団を、各々の人格を持った個人の集まりである〈サンキュロット〉の複数

形 (sansculottes) ではなく、抽象化されたサンキュロティズムと呼ぶことによって、その勢力が人間の常識を超えたものであり、革命勃発以前の暴徒のそれを凌駕する破壊力と社会的影響力を持つことを示唆している。さらに、カーライルは革命勃発を群衆が得体のしれない一頭の怪物であるかのような塊、サンキュロティズムに変貌する瞬間、すなわち、「突如として大地が口を開き、地獄の煙とギラギラした光の中に、多頭で火を吐く〈サンキュロティズム〉が立ち上がった」(第一部第六巻第一章)瞬間として表現する。その一方で彼は、例えば恐怖時代を描く第三部「ギロチン」の中で、断頭台へ追い立てられていった夥しい人々について、名のある者はその名を、名のない者もほとんどの場合において背景的な情報を言及することによって、彼らが互いに孤立した無力な人間であることを読者に印象づけている。そのようにしてカーライルは、革命が進行するに伴い、その力を肥大化させていったサンキュロティズムと、勢力が分散化し弱体化していったかつての支配者たちとを対比させているのである。

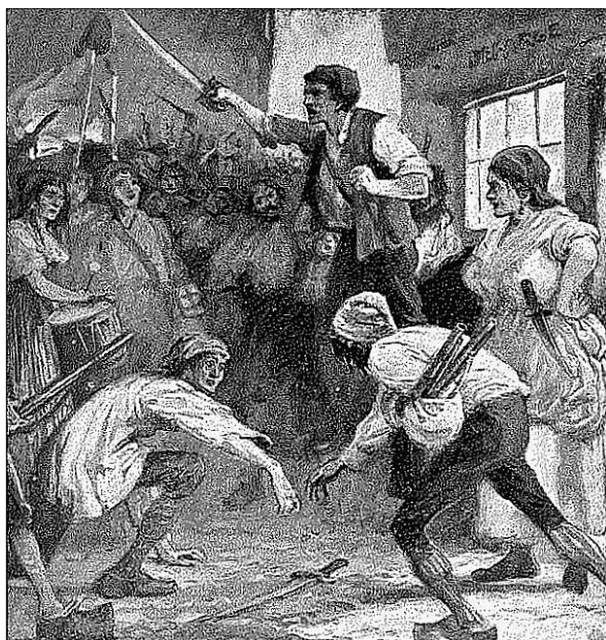
一方のデイケンズは、フランス革命が未曾有の大事件であることを表現するために、『二都物語』でカーニヴァルの日常化を叙述することに加え(矢次三六)、革命家集団を構成する人々が人間的な感覚を喪失し、常識の範囲を超えた暴力行為を行っている様子を描いている。次の引用は、彼らが革命の敵を虐殺している場面である。

回転砥石には一対のハンドルが付いており、それを二人の男が狂ったように回している。砥石が回転し彼らが顔を上げるたびごとに長い髪の毛がバサッと後ろに垂れ下がる。彼らの顔は、最も狂暴な野蛮人が最も粗暴な仮装をしたとしても、それより凄まじく狂暴だ。二人とも付け眉と付け髭をしており、その恐ろしい顔は血と汗にまみれ、わめき叫ぶたびごとに顔は歪み、目は野獣のような興奮と睡眠不足のために大きく見開かれ、ギラギラと光っている。この狂暴な男たちがグルグルと砥石を回すに伴い、もつれた髪の毛が目垂れかかったかと思えば、後ろに跳ねてバサッと首筋にかかる。数人の女たちがブドウ酒の杯を彼らの口元に持っていく。滴り落ちる血、こぼれるブドウ酒、そして砥石から流れるように飛び出す火花で、想像を絶するような血と火の光景が広がった。(第三巻第二章)

虐殺に興じる革命家たちの中には、「付け眉や付け髭」に加えて「レースや絹やリボンなどの略奪してきた婦人洋品を、まるで悪魔であるかのように飾り立てた」男性、すなわち、女装し見かけ上の性差を消滅させて、カーニヴァルの最も中心的な儀式である去勢を体現している男性がいるなど、彼らの行動は、乱飲乱舞の異教的な儀式を繰り広げるカーニヴァルとしての印象が強い¹¹⁾。それにも関わらず、その目が野獣のそれに喩えられているように、彼らは既存の秩序を破壊してエネルギを発散しているというよりも非人間化している。デイケンズはその過度の残虐性を明示するために、テルソン銀行のジャーヴィス・

ロリーと医師のアレクサンドル・マネットが恐怖に慄きながら彼らの様子を垣間見る姿を描写している。

革命政権下において、革命家たちは人を裁く権利を有し、彼らの残虐行為は処罰として正当化されている。そのために、そこでは、時流に反抗する者は排除される〈斉一性の原理〉がより強く作用していると言える。ロリーとマネットが以上の光景を革命家から身を隠して見ているのも、マネットの娘ルーシーが革命輪舞に恐怖を感じてもそれを表情に出さない（第三巻第七章）のも、反意を仄めかすだけで革命の敵と見なされ、排除すなわち虐殺されるからに他ならない。そのような精神的な圧迫を革命家たち自身も受けている。そのうちの一人として、現状に疑問を感じても、「自由のためだから」（第三巻第一章）と自分に言い聞かせながら職務を果たそうとするラ・フォルス監獄の牢番がいる。ディケンスは牢番の様子を描写しながら、三人称の語り手の口を借りて「自由という言葉が、この場所であくどく妙にそぐわないものに響いた」と皮肉り、革命によって牢番が自由を獲得したのではなく、心身共に拘束されるようになったことを示唆している。このような精神状態は、恐怖時代において、革命のスローガン「自由、平等、友愛」の「友愛」が兄弟（図版②）か敵かを見極める狭い意味で用いられ、「友愛か死か」という兄弟と敵とを峻別し、敵であれば虐殺することを含意するフリーズで使用されたことによっても裏づけられている。¹²ラ・フォルス監獄の牢番に限らず、革命政権下の人々は自分たちが兄弟か敵かを見極める眼差しに絶えず曝されてお



図版②「愛国者たちよ、兄弟よ、時は満ちたり」（第2巻第21章、A・A・ディクソンの挿絵、コリンズ・クリア・タイプ版）
ドファルジュが兄弟たちと共に
関の声を上げる。

り、敵と見なされれば断頭台に送られることを理解していた。要するに、ディケンズの考える革命家集団は、カーライルが描いたような塊^{マス}ではなく、暴力を背景にした斉一性の原理によって心身が拘束された個人の集まりである。換言すれば、カーライルが革命家集団を塊として描くことによって、革命勃発を機に群衆が政治的権力を獲得し社会的影響力を持つようになったことを描出しようとした一方で、ディケンズは未曾有の混乱の中で蠢く人々の抑圧された心理に着目したのだ。

革命政権下で心理的葛藤を経験しながら時流に抵抗する人物も、ディケンズは描いている（矢次六〇八）。ルーシーの夫チャールズ・ダーネイの身代わりとして処刑されることによって、「友愛か死か」の「友愛」を否定して「死」を選ぶシドニー・カートンである。彼は牢番を言い包めてダーネイと入れ替わる手筈を整えた後、無駄死にするわけではないと自分に言い聞かせるかのように、「イエスのたまいけるは、我は復生なり、生命なり」（『ヨブ記』一章二五節）という聖書の一節を頭の中で反芻しながら彷徨する。そうして迎えた朝、「ただ当てもなくクルクル回り終えると、そのまま流れに飲まれて海の方へと運ばれていく」セーヌ河に浮かぶ渦を眺めながら、「そっくりだ、俺に！」（第三卷第九章）と呟く。ポールドリッジは、カートンが海に流れ着く自分を想像しながら革命家と一体化しつつあるような思いに囚われている、すなわち、カートンが死を選ぶことによって革命の精神を受け容れ、革命の敵であることに甘んじていると解釈している（Baldrige 637, 640-41, 647, 649）。その根拠

の一つとしてポールドリッジは、ディケンズが第一巻第三章「夜の影」冒頭において、「人間がみんなそれぞれお互い同士に対して、深い神秘であり秘密であるようにできているということ」は、考えてみれば実に驚くべきことだ」と述べ、秘密を抱えて集団生活を送る人々の姿に感嘆していると解釈できる点を挙げている。要するに、ポールドリッジは、ディケンズが十九世紀的な個人主義への反発から、革命家集団や彼らの「友愛」の叫びに共感していると指摘し、さらに、ロリーのテルソン銀行という集団への忠誠心と革命における共同体の精神に共通性を見出しながら、カートンの自己犠牲的な死が無意識的な革命精神容認を示唆するものと見なしているのである。しかしながら、既に述べたように、ラ・フォルス監獄の牢番たちが革命政権下の社会に内在する暴力を恐れるあまり、本心を隠すのに懸命になっっている様子を描きながら、「友愛」の偽善性を暴いていることを考慮するなら、ディケンズが革命家集団の「友愛」に賛同しているとは言えない。チーズと同様に「テルソン独特の風味と青かび」（第二巻第一章）が出るまで行員を客の前に出さないテルソン銀行という集団にも斉一性の原理が作用していると考えられるが、「死」に直結する暴力が背景にある革命家集団と、ロリーの銀行への忠誠と顧客への献身ぶりが肯定的に描かれているテルソン銀行とを同等に考えることはできない。

「夜の影」冒頭部でディケンズが感嘆しているのは、人々が集団生活を送っていても、カーライルが記述しているような塊^{マス}になっていない点であろう。例えば、『二都物語』における代

表的な革命家であるドファルジュ夫妻の言動にもマネットの処遇を巡って齟齬が見られる。かつての「バスティーユの囚人」であるマネットに対し、ドファルジュが暴政の被害者としての同胞意識を失っていない一方で、マダム・ドファルジュは旧貴族であるダーネイの救出を試みる革命の敵以外の何者だとも思っていない。その結果、彼女は単独でマネット一家の殺害を試み、銃の暴発による孤独な死を遂げるのだ。また、暴力に満ちたパリを離れてマネット一家はロンドンへ逃れ、そこで新しい命が誕生することが仄めかされるものの、マネットが「バスティーユ手記」の中で義理の息子ダーネイを糾弾した責任を痛感して陥った神経衰弱から回復する姿も、ダーネイが旧貴族の末裔としての罪悪感から失った生気を回復する姿も小説中に描かれていない。そのように心理的に過去に囚われてしまった二人と生活を共にしながら、ルーシーは息子を見るたびに、カートンの自分に対する思慕の情を密かに思い出すと予測される。このように家族という集団を形成していても自分だけの秘密を抱え続ける人間の本性をディケンズは「夜の影」冒頭部で示唆しているのではないだろうか。

第三節 群衆が潜在的に保持する暴力性

結論を先に言えば、革命家に限らず、人間が合理的な是非の判断をしないまま時流に流されるという集団心理の影響を受ける傾向に、そして、集団心理の影響を受けた人間が暴力的



図版③「似ている」(第2巻第3章、フィズの挿絵)

被告人のダーネイと、被告側弁護人の友人で同僚でもあるシドニー・カートンとが瓜二つなのに気づいて、証人も「アオバエ」たちも驚愕する。

になる可能性に、ディケンズは関心を持っていたと考えられる。『大いなる遺産』第五章で、ピップを背負ったジョーが囚人逮捕に向かう軍曹たちと共に疾走する場面は、心優しい彼でさえ無意識的な暴力志向の気持ちがあつて、それが集団の中で表出することを暗示している。暴力的な集団行動を描きながら、ディケンズ自身がそれに心理的な影響を受け、自分もその一員であるかのような感覚に陥っている例として、『バーナビー・ラッジ』執筆中の一八四一年九月にジョン・フォースターに宛てた書簡における、「私はちょうどニューゲイト監獄の囚人を開放し、マンスフィールド卿の屋敷を焼き討ちし、暴虐の限りを尽くしたところです。(中略)仕事中にはたいへん煙いので」(Letters 3: 363-4)という記述がある。以上のような興味および彼自身の傾向から、ディケンズは『二都物語』で革命家集団を、集団心理の強い影響を受けた個人の集まりとして描いている。

もともと、ディケンズは『二都物語』においてでさえ、群衆が暴力的になる可能性について考察する場合に、革命家たちだけを対象にしているわけではない。彼は、第二巻でダーネイが反逆罪の嫌疑をかけられた裁判(図版③)の傍聴席に、死刑判決が下されることを期待して群がる「アオバエ」(第二巻第三章)たちもその対象にしている。革命家集団と異なり、彼らは直接的に暴力行為を行わないものの、彼らの「心の中で(被告であるダーネイは)縊り殺され、斬首され、四つ裂きに」(第二巻第二章)されている。彼らのそのような心の内を描写しながら、ディケンズは、恐怖時代のフランスには及ばないにして

も、一七八〇年頃のロンドンで「絞首執行吏が絶えず需要に追われ、ズラリと並べた夥しい罪人たちの首を片っ端から締め上げたかと思うと、火曜日に捕えられた押し込み強盗を早くも土曜日には絞首刑にする」(第一巻第一章)ほど頻繁に死刑が執行され、「信書の不正開封も死刑、四〇シリング六ペンスのソ泥も死刑。テルソン銀行人口の馬番は馬を連れて逃げたというので死刑に処せられた」(第二巻第一章)と皮肉を込めて叙述し、そのような世相を受けて、大衆が腐肉を漁る「アオバエ」のごとく処刑場に集まり、公開処刑見物を娯楽にしていたことを示唆している。¹³要するに、結末部でマネット一家が恐怖時代のパリからロンドンに逃れ、直接的な暴力に対する恐怖とは無縁の生活を送ることが予感される点だけに着目すれば、『二都物語』では、恐怖に満ちたパリと平穏なロンドンが対照的に描かれていると言える。しかしながら実際には、ロンドンの群衆も潜在的な暴力性を保持していたという見方を、ディケンズは提示しているのである。

オディーによれば、ディケンズが『二都物語』を執筆した直接のきっかけは、ウィルキー・コリンズの『凍れる海』(一八五六年)のリチャード・ウォーダー役を素人劇団の一員として演じていたときにインド大反乱(一八五七―五九年)が勃発したのを知り、一八五〇年代になっても困窮を強いられているイギリス本国の社会的弱者がフランス革命と同規模の動乱を引き起こすのではないかという、それ以前から抱いていた懸念をより強くしたことにある(Oddie 14)。それを裏づけるかのように、

ディケンズは『二都物語』第一巻第一章において、イギリスとフランス両国の一七七五年頃を「良きにせよ悪しきにせよ、最上級の形容詞においてのみ理解されるべき時代」と記述し、さらに、貴族たちが「国家お仕着せの食い扶持を保障されていた」一方で、日々の食事にも事欠く貧民が存在していたことを仄めかしながら、「すべてはあまりにも現在に似ていた」と述べている。すなわち、ディケンズは、ディズレーリが『シビル』(一八四五年)に「二つの国民」という副題を付け、貧富の差が拡大して国家が分裂するのではないかという危機感を示唆した一八四〇年代から一〇年以上が過ぎても危機的状況が続いているという懸念と、一八五〇年代のイギリス国民が一七七五年前後と同様に荒んだ精神状態にあるという認識を小説冒頭で示した上で、フランス革命をプロットの中心に据えた物語を『二都物語』で展開しているのである。

十八世紀後半のイギリスにおいて群衆が潜在的に保持していた暴力性に、ディケンズは『バーナビー・ラッジ』の中で焦点を当てていた。この歴史小説のプロットの中心に据えられたゴードン暴動は、『二都物語』のダーネイがイギリス政府に対する反逆罪で被告席に立った裁判(第二巻第一章)が行われた一七八〇年に勃発している。どの程度意識的にそのような設定がなされたのかについては定かでないものの、この時期のイギリスにおいて、社会の停滞および不活性によって精神的に抑圧された人々が他人に対していわれのない悪意を抱き、死刑などの暴力行為を見物することも含めて暴力を強く志向していたと

ディケンズが考えていたことは、既に述べたように確かだと言える。ディケンズは、姉が強姦され兄が虐殺されたマダム・ドファルジュに典型的に見られるように、苦難を蒙ることによって人が暴力に駆り立てられる様子を描き、暴力性の背後にはそれを發揮せざるを得ない事情があることを明示する場合がある。その一方で彼は、停滞した社会システムが知らず知らずのうちに人々の心の中に鬱積させる、いわれのない悪意が暴力行為の原因になる場合もあると考えていた。だからこそ、彼が社会改革を志す小説家として、十八世紀のイギリスおよびフランスで社会的混乱を生じさせた為政者、もしくは、十九世紀において同様の混乱を繰り返させようとしている為政者を糾弾する場合、『二都物語』のサン・テヴレモンド侯爵やその弟のように実際に悪事を働いた人物だけではなく、『バーナビー・ラッジ』第六章に登場する暴徒から逃げ惑うカトリック教徒を救済しなかったロンドン市長のように、弱者を顧みない政治家も十分にその対象になるのである。

ゴードン暴動の暴徒を「不当な刑法と、不正な監獄規則と、最悪の警察によって生み出された、ロンドンの屑とも滓とも言うべき連中」(第四章)と呼ぶとき、ディケンズは既に述べた理由で「不当な刑法と、不当な監獄規制と、最悪の警察」を非難しているが、彼らに操られている「ロンドンの屑とも滓とも言うべき連中」を許容しているわけではない。知的障害者のバーナビーが最終的に恩赦の対象になるものの一旦は死刑宣告を受けなければならないのも、偽金作りに手を染めた母親が公

開処刑されたときわずか六歳であつたにも関わらず、何の社会的援助も与えられなかつたヒューが処刑されなければならぬのも、そのためである。また、十分な根拠が見出だされてもマダム・ドファルジュの暴力行為が許容されず、ミス・プロスとの格闘の最中に死亡しなければならぬように、暴力行為を行った者は社会的弱者であつても一定の裁きを受けなければならない。その理由は、ディケンズが『バーナビー・ラッジ』を描きながら心理的に暴徒に同化したり、プレストン・ストライキを取材に行つたときに「何もかも平静で、人々の行儀がいい」のに拍子抜けしたりすることがある (House 207) と同時に、群衆による暴力行為に恐怖心を抱いていたためである。その証拠の一つとして、『骨董屋』のネル・トレントがバーミングラムと思われる工業都市で、今にも暴動を起こそうとしている労働者の群れに遭遇する悪夢のような場面がある (第四五章)。そこで労働者たちは革命輪舞に興じる革命家と同様に非人間化し、「荒々しく野性的」な表情でかがり火を持って行進し、怒号を飛び交わせながら、破壊行為をするために飛び出して行く。このように虐げられた群衆の持つ暴力性に対して恐怖心を抱いているために、ディケンズは群衆が政治的な権力を握つて衆愚政治を展開するのではないかと懸念し、『二都物語』における共和主義者の行為を、旧制度下での悪政と同様に忌むべき暴力として描いたと推測される。換言すれば、サン・テヴレモンド侯爵とその弟が貴族としての特権を濫用して、マダム・ドファルジュの家族やマネットの心身に与えた暴力と、共和主義

者が偽善的な「友愛」の名の下に、カートンと共に処刑されるお針子をはじめとした無辜の民に与えた「死」は、ディケンズから見れば同質のものなのだ。だからこそ、神経衰弱に陥つていた「バステイーユの囚人」マネットは正気を取り戻して一旦は「甦った」ものの、旧制度の下でかつて受けたのと同質の暴力に革命政権下でも遭遇し、獄中で書いた手記を公開されたのを契機として、「バステイーユの囚人」だつた頃に心理的に回歸するのである。しかも、ロンドンの裁判所に群がる「アオバエ」たちも『二都物語』に書き込まれていることから判断するならば、ディケンズは、恐怖政治が歴史上稀に見る異常事態であることを描出しようとしているだけではなく、虐げられた群衆が想像を絶する暴力性を発揮する可能性を示唆していると言える。

第四節 群衆の孤独と暴力性

『バーナビー・ラッジ』における群衆の暴力行為について、フライシュマンは大量虐殺^{ボグロム}だという見方を、グラヴィンはヨーロッパにおいてファシズムが発生する前段階を記しているという見方を示している (Glavin 95)。前者は大量虐殺だと解釈できる理由として、ゴードン暴動が社会組織の変革を目指す革命ではないことを挙げているが、『二都物語』における革命家集団もそのような変革を目指していない。彼らは、マダム・ドファルジュの復讐心に象徴されているように、旧制度下で自分たち

が受けた苦難と同程度の苦難を、旧貴族を含む革命の敵に与えて報復しているに過ぎない。サンダーズが一九九八年のオックスフォード・クラシックス版『二都物語』の序文で「ディケンズの作品にはよくあることだが、個人が制度の不当な要求から離脱するのであって、制度が修正されるわけではない」と述べているように、マネット一家が恐怖政治の影響下から「離脱」してロンドンに赴いても、恐怖政治は修正されない。また、カートンが「死」を選択して偽善的な「友愛」に反意を示しても社会制度のあるべき姿は明示されていないし、マダム・ドフアルジュが銃の暴発によって死亡しても(図版④)彼女は個人的に罰せられただけであり、恐怖政治は終わらない。要するに、『二都物語』でディケンズは、旧制度時代の暴力が恐怖時代において新たな暴力を呼び起こす様子、すなわち、暴力が連鎖する様子を描いているのである。

グラヴィンは『バーナビー・ラッジ』におけるゴードン暴動をファシズムの前段階として論じる際、ファシズムに見出される要素を五点挙げる中で、国内の異分子に対して不寛容である点や、脅迫行為を絶えず行うことによって離反者が出ないようにする点という、共和主義の特徴として『二都物語』に書き込まれている要素も挙げている(Glavin 106)。すなわち、ファシズムについてのグラヴィンの定義に従うなら、ディケンズはこの小説において、人がファシズムに連動する衝動に駆られる様子を描いていることになる。エーリッヒ・フロムがナチズム勃興の心理的背景を分析する際に引用しているヒットラーの言



図版④「銃の轟音のあと」(第3巻第14章、ジョン・マクレナンの挿絵、ハーパーズ・ウィークリー版)

ミス・プロスは煙の中に一人立ち、その煙はマダム・ドフアルジュの魂と共に虚空に消えつつあった。

葉の中にも、『二都物語』で革命輪舞に興ずる革命家たちが受けた心理的影響について述べたかのような箇所がある。

新しい運動の帰依者になろうとするとき、個人は孤立的な感じ
がして、自分一人ではないかという恐怖にとらわれがちである
が、彼は大衆集会で初めてより大きな同志の集まりをみて、た
いていの人を力づけ勇気づけるものを受けとるのである。(中
略) もし個人が自分の小さな仕事場や、自分を非常に小さなも
のに感じている大企業から、初めて大衆集会に足を踏み入れ、
同じ信念を持つ何千という人々の間に身を置くならば(中略)
彼は我々が大衆暗示と呼ぶところの魔術的な影響に屈するので
ある。¹⁵

「大衆集会」で「魔術的な影響」を受ける前提条件として、ヒッ
トラーが個人の持つ「孤立的な感じ」を挙げているように、ディ
ケンズは『二都物語』第一巻第三章「夜の影」の冒頭部において、
人々が集団生活を送っていても心理的に孤立していることを指
摘していた。もっとも、都市生活者の孤独は、産業革命を経て
急速に都市化が進んだ十九世紀になつて認識されるようになって
たと推測される現象である。実際にディケンズは、例えば『ビ
クウィック・クラブ』の挿話「狂人の手記」(第十章)において、
平凡に見える隣人が実際には狂人で、殺人者の可能性もあるこ
とを暗示して読者の恐怖心を煽りながら、都市の住人がいかに
孤立しているかを表現するなど、同時代を舞台とする作品にも、

この特徴を書き込んでいる。すなわち、十八世紀後半のイギリ
スとフランスを描く『二都物語』に十九世紀的な特徴を書き込
んでいることは、ディケンズには物事を時系列順に描く意思が
ないというハンフリー・ハウスの指摘(House 21)の傍証に
なり得る。とは言え、カーライルと同様の循環的な歴史観の持
ち主であるディケンズが、¹⁶十八世紀後半と十九世紀それぞれの
時代を生きた人々の心理に共通性を見出し、ゴードン暴動もし
くはフランス革命と同規模の動乱が繰り返されるのではないかと
懸念した結果、彼が同時代を扱う作品にも書き込んでいる都
市生活者の孤独を『二都物語』でも叙述したと解釈することも
可能であろう。孤独であるからこそ、「大衆集会」のようなカー
ニヴァル的な場面で気分が過度に高揚し、集団に賛同しない者
に対して暴力性を発揮するのだ。要するに、ディケンズは孤独
な人間の心理と、そのような人間が集団になることによって発
揮する暴力性に関心を抱き続け、フランス革命における集団に
もそのような要素を見出したのである。

* * * *

ディケンズは『二都物語』において、期間限定の祝祭である
はずのカーニヴァルが日常化した異常事態としてフランス革命
を描くと同時に、革命家集団を、暴力を背景とした斉一性の原
理によつて心身が拘束された孤独な個人の集まりとして表現し
た。革命家集団のこのような描き方は、カーライルが『フラン

『ス革命』の中で、彼らを未曾有の破壊力と社会的影響力を持つ塊として描いたのと対照的である。しかも、その描き方から、孤立した個人には特定の時流に容易に影響される傾向があり、彼らが虐げられている場合には特に、集団を形成することによって想像を絶する暴力性を発揮する可能性を有していることに對し、ディケンズが強い懸念を抱いていたと推察できる。そのような集団が政治的な権力を握って衆愚政治を展開するのではないかということについても彼が懸念していたことは、『二都物語』における共和主義者の行為が、旧制度下での悪政と同様に忌むべき暴力として描かれていることから明らかだと言える。ディケンズは同様の懸念を、フランスの共和主義者だけではなく、『二都物語』や『バーナビー・ラッジ』の中で一七八〇年頃のイギリス人についても仄めかしている。さらに彼はその他の小説で、十九世紀半ばのイギリス人についてもその懸念を表明しているが、この点から、彼が循環的な歴史観の持ち主であることや、孤独な群衆の暴力性に彼が関心を抱き続けたことが解る。

注

- 1 Georg Lukács, *The Historical Novel*, trans. Hannah and Stanley Mitchell (1937; London: Merlin, 1989) 23.
- 2 ニハイール・バフチーン『フランソワ・ラブレールの作品と中世・

ルネッサンスの民衆文化』(川端香男里訳、せりか書房、一九九〇年) 二五〜二六頁。

3 名誉革命はイングランドではほぼ無血で達成されたが、アイランドでは一六八九年から九一年にかけてウィリアム・オブ・オランジが起きた。

4 Edmund Burke, *Reflections on the Revolution in France* (1790; Oxford: Oxford UP, 1993) 71.

5 H. N. Brailsford, *Shelley Godwin and their Circle* (1913; London: Oxford UP, 1954) 15. そのような視点からバークが革命家たちを「豚のような大衆」(Burke 79)と呼んだのに対して、トマス・ペインが『人間の権利』(一七九一年)を著し、痛烈に反発した。

6 John Stuart Mill, "Scott's Life of Napoleon" (1828), *Essays on French History and Historians*, ed. John M. Robson (Toronto: U of Toronto P, 1985) 58.

7 フランス革命における群衆を進歩の担い手と見なす立場と、無知で野蛮な階層と見なす立場がある。ミシュレは前者の代表格であり、彼らの「活力」が荒廃した社会を再生させると『民衆』において主張した。

8 ミルによると、カーライルは『フランス革命』において感覚的になり過ぎて、フランス革命を的確に分析できていなかった。John Stuart Mill, "Carlyle's French Revolution" (1938), Robson 161.

9 David Lodge, "Crowds and Power in the Early Victorian Novel," *After Bakhtin: Essays on Fiction and Criticism* (London:

Routledge, 1990) 108.

10 革命家の別称へサンキュロットは、貴族の服装であるキュロットではなく、長スボンという社会の底辺層の服装を取り入れた彼らの貴族制の否定を含意している。詳しくは、能澤慧子『モードの社会史——西洋近代服の誕生と展開』（有斐閣選書、一九九一年）一五三頁参照。

11 バフチーン 一六頁。

12 Marcel David, *Fraternité et Révolution Française, 1789-1799* (Paris: Aubier, 1987) 145.

13 デイクENZは『バーナビー・ラッジ』第三章で死刑執行人ネッド・デニスに、メアリ・ジョーンズを処刑したときのことを楽しげに語らせることを通しても、当時の絞首刑に対する風潮を批判している。ジョーンズは、五ポンド半ほどの布を万引きしたという執行猶予程度の罪で処刑された、実在の人物である。彼女については同小説「序文」でも言及されている。

14 Avrom Fleishman, *The English Historical Novel: Walter Scott to Virginia Woolf* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 1971) 105.

15 エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』（日高六郎訳、東京創元社、二〇一一年）二四五頁。

16 カーライルの循環的な歴史観については、Robin Gilmour, *The Intellectual and Cultural Context of English Literature 1830-1890* (London: Longman, 1993) 32 に詳しく。